



『日本・ポーランド関係史 1904～1945』（増補改訂版） エヴァ・パウシュルトコフスカ;アンジェイ・タデウシュ・ロメル（著）

待望の新版

尾形 芳秀

本書は柴理子氏の翻訳で、2009年に初版、2019年に増補改訂版が出版された。増補版は、初版と比べて本文で127ページ、資料で13ページも増えている。日・ポ関係を深く知るための、バイブルともいえる書であり、私たちポーランド文化を学ぶものにとっては、待望の新版であろう。



各章の概要

第一章では、1904年以前のポーランドと日本の交流や、日本における最初のポーランド情報について、より詳しく紹介。ロシア統治時代にサハリン島に流刑になったブロニスワフ・ピウスツキや、単騎シベリア横断調査を敢行した福島安正、ポーランド分割と独立運動を取り上げた東海散士らについても、加筆されている。

第二章では、日露戦争前夜の、宇都宮太郎や明石元次郎らの活動を紹介。ポーランドからは、ロマン・ドモフスキとユゼフ・ピウスツキが来日し、日本政府に捕虜解放を要請、ロシア軍の中の同胞兵士を松山捕虜収容所に見舞っている。

第三章では、日本によるポーランド独立の承認（1919）以降、シベリア出兵へのポーランド人の参加、公使館の相互設置、シベリアのポーランド孤児救済、スタニスワフ・パテック特命全権公使の樺太訪問、ポーランドで最初の日本語教師、梅田良忠などが紹介されている。

第四章では、満州国建国や日独伊三国同盟をめぐるポーランドとの関係、ソ連奥地のポーランド人抑留者たちの救援活動、駐日ポーランド大使館廃止のほか、ゼノ修道士、「アウシュビッツの聖者」コルベ神父についても紹介されている。

第五章では、カウナスの杉原千畝領事による「命のビザ」発給の顛末、杉原や、ストックホルム駐在武官小野寺信将軍による、第二次世界大戦中の日・ポの諜報活動協力、開戦後ソフィアに移り朝日新聞嘱託となった、梅田良忠の情報活動などが初版より格段に詳しく紹介されている。

欠落部分と補足

サハリン島時代に流刑になり、日露戦争後に日本領となった樺太に、自ら望んで残留したポーランド人たちのことは、十分に触れられていない。初代駐日公使スタニスワフ・パテックは、樺太に来て同胞人に会い、彼らの長年の念願だった母国のパスポートを交付したが、樺太のポーランド人は、その後も帰国の機会を失い、日本がソ連に敗戦したあと、1948年によくやく大半が母国へと旅立った。

また、ユゼフ・ピウスツキの使者アレクサンデル・ヤンタ=ポウチンスキも、樺太に残された、兄ブロニスワフの妻子の消息を探しに来て、ユゼフからの支援策を伝え、同時に在樺ポーランド人会の歴代リーダーと接触している。

樺太ポーランド人会の初代リーダー、フランツ・チェハンスキは、同胞をコルサコフ監獄の苦境から救うため、未開地の開拓に志願し、「ワルシャワ村」をつくっていた。それが予期せぬ日露戦争に遭遇して、ロシアの悪夢の流刑の島が解体され、彼らは解放されることになった。フランツは、この戦いを冷静に偵察し、樺太に侵攻してきた日本軍と接触し、再度同胞を守ったのである。

一方、ブロニスワフ・ピウスツキが、サハリン島の北部から南部に研究拠点を移したときも、フランツらは陰で支えていた。ブロニスワフは、日露戦争を機にこの島を離れている。

杉原、梅田、小野寺は、ポーランド地下組織から得た、独ソ開戦や、ヤルタ会談におけるソ連の対日参戦の約束など、重要な情報を正確に本国に伝えたが、その情報は活かされなかった。

「シベリアの孤児救済」や「杉原千畝の命のビザ」は、日・ポ友好の証しとして今ではよく知られた話だが、1990年頃までは広く知られてはいなかった。杉原が日本で広く知られるようになったのは彼の死後のことで、政府による名誉回復は1991年に鈴木宗男（当時外務政務次官）によってだった。ポーランドからの情報でようやく彼の功績を追認したということは、誠に恥ずかしい限りであった。杉原はソ連が最も恐れる情報通として知られていたが、日本政府はその情報の価値を理解せず、先の大戦で大きな禍根を残すことになった。

日・ポ間には、対等な立場で無償の交流があっ

たことは、世界史の中でも稀有な例であろう。これには、両国政府ばかりではなく、双方の名もなき人々の貢献が多々あったことは忘れられない。

本書は、ポーランド人学者の労作で、日本には

各論はあっても、このような通説ものはないのは残念である。本書のためには、多くの方々の貴重な情報提供があったことも、記憶しておきたい。

(おがた・よしひで、サハリン・樺太史研究家)

ポーランド・日本美術技術博物館マンガ刊 (絵本) 2019.9 (紙芝居) 2020.5

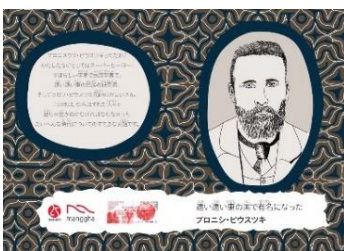
『遠い遠い東の国で有名になったプロニシ・ピウスツキ』
カタジナ・ノヴァク (文)、パウリナ・パジジェラ (絵)

小さな絵本が紙芝居に 熊谷 敬子

ここ数年、本当に幾多のシーンでこの名を聞いたことだろう。重厚な学術論文や、民間の歴史研究文献、映画、創作詩、エッセイ、直木賞受賞小説はまだ記憶に新しい。私の中ではとうに伝説化したヒーロー、ピウスツキ。

当会でも、継続の誉れ高い“午後のポエジア”をはじめ、ここ数年、彼の関連例会は衰え知らずである。極め付けは、この児童向けの小冊子が、何と紙芝居として製作されましたとのニュース。

白老町のウポポイ開業が、コロナ禍で遅れながらも、ようやくオープンしたというタイミングである。



遠い遠い西の国ポーランドのご縁からの伝達で、皮肉にも道民の私が、近くて近すぎて痛みさえ覚える「アイヌ文化とは」を

受理するのだから、本末転倒の情けなさに、深謝するしかない。

しかしそんな矛盾を清算出来るほど、私のヒーロー、ピウスツキの一人称の語り口と、児童書の持つシンプルさが逆に爽快で、アイヌ女性の象徴を全てチュフサンマに捧げたいほど、二人の物語が清冽に迫るのは不思議である。

ましてや、彼の人生の舞台が紙芝居という枠組で紹介出来るとなったなら、是が非でも私にその歳月をめぐらせて頂きたいと、強気でいう衝動が走る。

ラストのページには、彼の足跡の 29 都市が世界地図のイラストに記載され、近代の旅の過酷さよりも、生き抜いた人間像の壮大さが際立つ。

これに触れた子供達は身乗りだして目を輝かせるに違いない。ポーランドの子供達はまっさらな気持ちでアイヌ文化に触れ、染み込ませるであろう。

我が北海道の子供達にも、近い近いサハリンで、遠い遠いポーランド人が有名になったお話を聞かせてみたいものだ。
(くまがい・けいこ)

ポーランド&ニッポン歳時記 33

夏の日曜日ショパン・コンサート

子どもの頃初めて書いた短編の一つは、ワルシャワのワジェンキ公園で行われていた夏のショパン・コンサートの印象についてで、当日のピアニストは青いドレスを着た日本人女性でした。そのコンサートは私にとって日本との最初の接触でした。今年の夏休み、日曜日にワジェンキ公園へコンサートを聞きに出かけました。ショパンの銅像の下にピアノはなく、周囲に立てられたスピーカーからスタジオ収録の演奏が聞こえるだけでした。近い将来また普通のコンサートに戻れることを願うというアナウンスが流れていました。

w czasie pandemii スピーカに
wysokie dźwięki nikną 消える高音
w szumie głośnika パンデミア
Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

burza codzienna 日々嵐
raz rano raz wieczorem 朝な夕なに
huczy za oknem うなる外
Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

遠郭公武四郎の十勝越え
山崩れ河川決壊夏の乱
コロナ禍の吾ら
脳は痩せ肉体太る金魚かな
岩見沢市、霜田千代磨